素材が **ART** と出会うと呼吸を始める

HI-MACS® ART

プラスチックの記憶

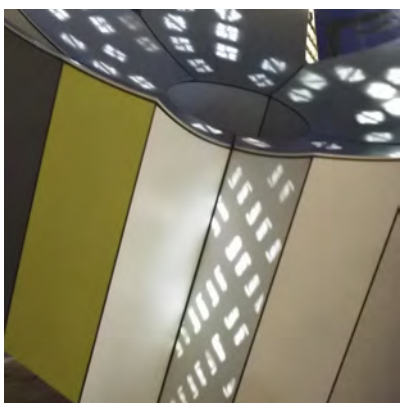
彫刻はかたちをうみ出すことである。かたちをうみ出すには物質が必要だ。彫刻ではそれを素材と呼び、素材にどのように手を加えかたちをつくろうかと思案することが創作の中心にある。素材の特徴は感覚に刻まれる。硬さは？ 肌触りは？ 温度は？ 音色は？～などなど、人間は物質の特徴を感覚の中に記憶する。〈記憶〉と〈かたち〉を再構築することが彫刻の基本的な作法と言えるだろう。

プラスチックの出現は 1835 年にポリ塩化ビニル粉末が発見されたことに端を発する。1909 年にアメリカでベークライトという商品が開発されたことが合成樹脂の最初だという。つまり私たちはプラスチックに対する記憶を 100 年あまりも抱えているのだ。現代ではプラスチックや合成樹脂はとても身近な存在であり、私たちの生活には欠くことが出来ない物質であることには異論がないだろう。木や土、金属、石、などと人類との長いつき合いには及ばないが、プラスチックに対しても私たちはそれなりの経験則を見出しているはずだ。

100 年の記憶を持ちながら芸術の上では始まったばかりのプラスチック。中でも人工大理石は不思議な存在である。プラスチックでありながら大理石であるという二重性によって、素材に対する私たちの記憶は二重映しとなる。素材の特性に目を向ければ「硬質の板でありながら有機的な曲面を描くことができる。」「抵抗感のある表情を持ちながら光の透過性を備える。」など相対する二面性を持つ。この二面性は発達した技術があるからこそ実現できる特質である。二重性と二面性を持つ人工大理石は極めて現代的な素材であり、新しい彫刻の作法をうみ出す可能性を秘めている。

人工大理石は私たちの記憶を深化させ、芸術表現を拡張させるのだ。

美術家 高須賀昌志



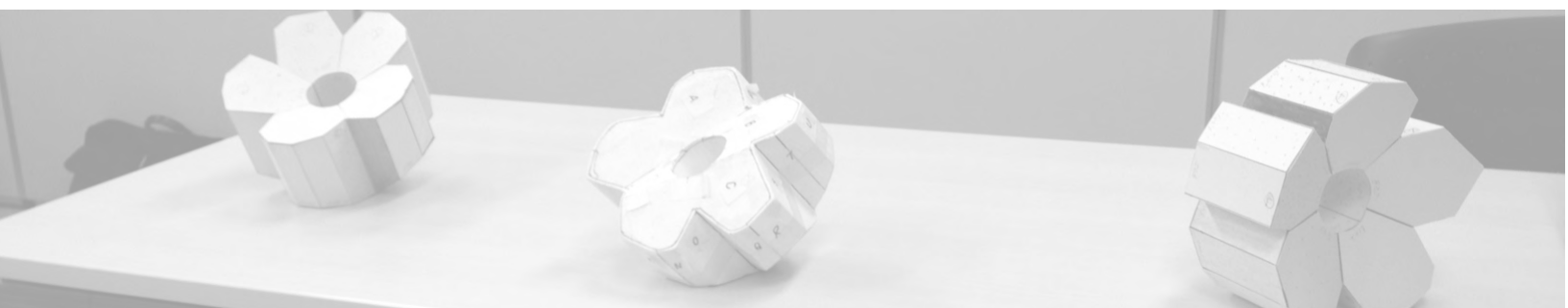
The Flowers of KOBE zigzag & round

size : W3200×D3200×H3000
Location : KOBE Biennale 2013 : Kobe,Hyogo,Japan

個展「White Flower」白い花

表徴 - Curve White Flower

高須賀 昌志
美術家

略歴
1965 年横浜生まれ。
1992 年東京藝術大学大学院美術研究科を修了。
1991 年安宅英一賞（東京藝術大学）受賞。　日本各所にパブリックアートを設置。
代表作に〈**SANJIN**〉〈**FUJIN**〉〈**KAIJIN**〉（東京ミッドタウン・檜町公園）や〈家族の肖像〉（ふじみ野駅）などがある。
個展（潺画廊、あかね画廊　等）グループ展（「**NICAF 2003**」、「ドローイングをめぐって」、「東京コンテンポラリーアートフェア」等）多数出品。 環境芸術、環境デザインをフィールドに、領域を越えた制作・研究をおこなう。著書に「創造のたね―ドローイングのはなし」（日本文教出版）、「高校美術 **Art and You**」**(24** 年文部科学省検定教科書 **)** 等。美術教育の分野に研究活動を広げている。 現在　埼玉大学教授　環境芸術学会会長　日本デザイン学会，大学美術教育学会，基礎造形学会会員、寧波大学科学技術学院 客員教授 、浙江大学寧波理工学院 名誉教授

URL　takasuka@mail.saitama-u.ac.jp